

教育哲学会第62回大会 プログラム

2019年10月12日(土)～13日(日)
広島大学 東広島キャンパス



共催

広島大学教育学研究科

広島大学教育ビジョン研究センター(EVRI)

第62回教育哲学会大会準備委員会

大会日程

10月11日(金)

15:30 ~ 17:30	全国理事会 (管理棟 第一会議室)
---------------	-------------------

10月12日(土)

9:00	受付 (教育学部 L 棟ロビー)
10:00 ~ 12:30	一般研究発表①
12:40 ~ 13:40	ランチタイムセッション (教育学部 K108教室)
13:50 ~ 14:50	総会・奨励賞授賞式 (教育学部 L205教室)
15:00 ~ 18:00	研究討議 (教育学部 L205教室)
18:15 ~ 20:00	懇親会 (北第二福利会館)

10月13日(日)

9:00	受付 (教育学部 L 棟ロビー)
9:30 ~ 12:00	一般研究発表②
12:10 ~ 13:10	全国編集委員会 (管理棟 第一会議室)
13:20 ~ 16:05	課題研究 (教育学部 L205教室)
16:15 ~ 18:15	ラウンドテーブル

※一般研究発表は、発表20分／質疑応答5分です。

万一発表を取りやめる場合、発表者は速やかに大会準備委員会にご連絡ください。

なお、欠席の場合、発表の繰り上げは行いません。

E-mail: pesj2019@hiroshima-u.ac.jp (教育哲学会第62回大会準備委員会事務局)

※K116教室はキッズルームとなっております。保育士による託児サービスはございません。

大会参加費 (会員・非会員共通)

大会参加費 一般 3000円 学生・非常勤 2000円

懇親会費 一般 4000円 学生・非常勤 3000円

PROGRAM

Date: 12-13 October, 2019

Venue: Buildings K & L, Graduate School of Education, Hiroshima University (Higashi-Hiroshima)

11 October (Friday)

TIME	CONTENTS	VENUE
15:30 ~ 17:30	Meeting of the Board of Directors	The Meeting Room #1

12 October (Saturday)

TIME	CONTENTS	VENUE
9:00	Registration	Lobby at Building L
10:00 ~ 12:30	Individual Presentations 1	K102, K104, K108
12:40 ~ 13:40	Lunch Break / Lunch Time Session	(Lunch Time Session at K108)
13:50 ~ 14:50	General Assembly & Encouragement Prize Ceremony	L 205
15:00 ~ 18:00	Symposium "Inheritance of HIROSHIMA Memory and Emerging Reconciliation"	L 205
18:15 ~ 20:00	Reception Dinner	Cafeteria of The North 2 nd

13 October (Sunday)

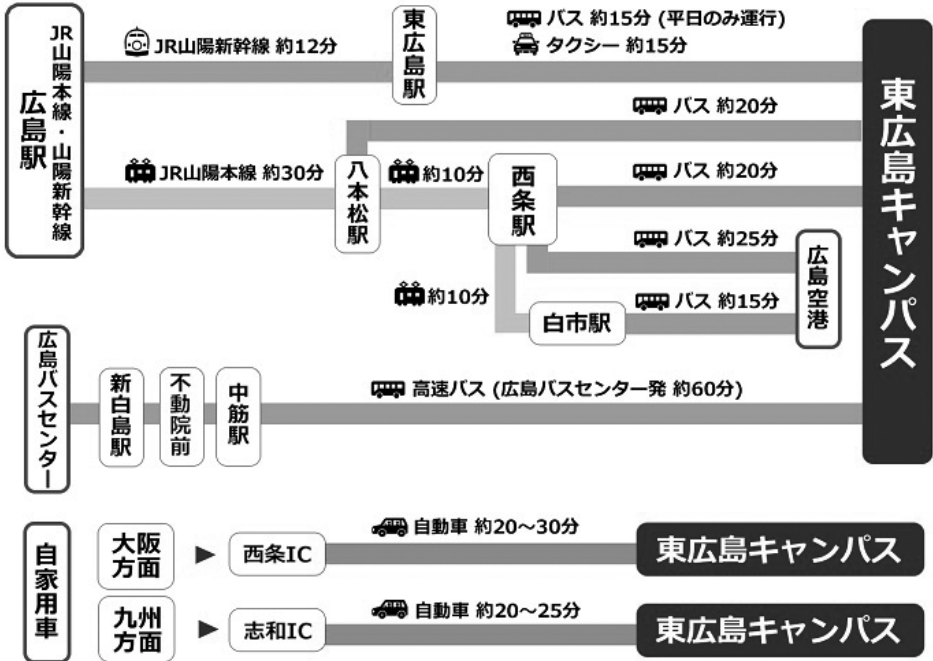
TIME	CONTENTS	VENUE
9:00	Registration	Lobby at Building L
9:30 ~ 12:00	Individual Presentations 2	K102, K104, K108, L102
12:10 ~ 13:10	Lunch Break	
12:10 ~ 13:10	Meeting of the Editorial Committee	The Meeting Room #1
13:20 ~ 16:05	Thematic Research Session "Globalization, Internationalization, and Universality of Philosophy of Education"	L 205
16:15 ~ 18:15	Round Table	K102, K104, K108, L102, L104, L108, L109

※ Individual Presentations consist of 20-minute presentation and 5- minute discussion.

PARTICIPATION FEES

	Employed	Students
Conference participation	3,000 yen	2,000 yen
Reception Dinner	4,000 yen	3,000 yen

主要アクセス



【山陽本線をご利用の方】

- JR 山陽本線「西条駅」下車。
- 南口③番乗り場から広島大学線の路線バスに乗車。
- 「広大中央口」下車。

【新幹線をご利用の方】

- JR 山陽新幹線「東広島駅」下車。
- タクシーで広島大学教育学部玄関前へ（路線バスは土日運休）。

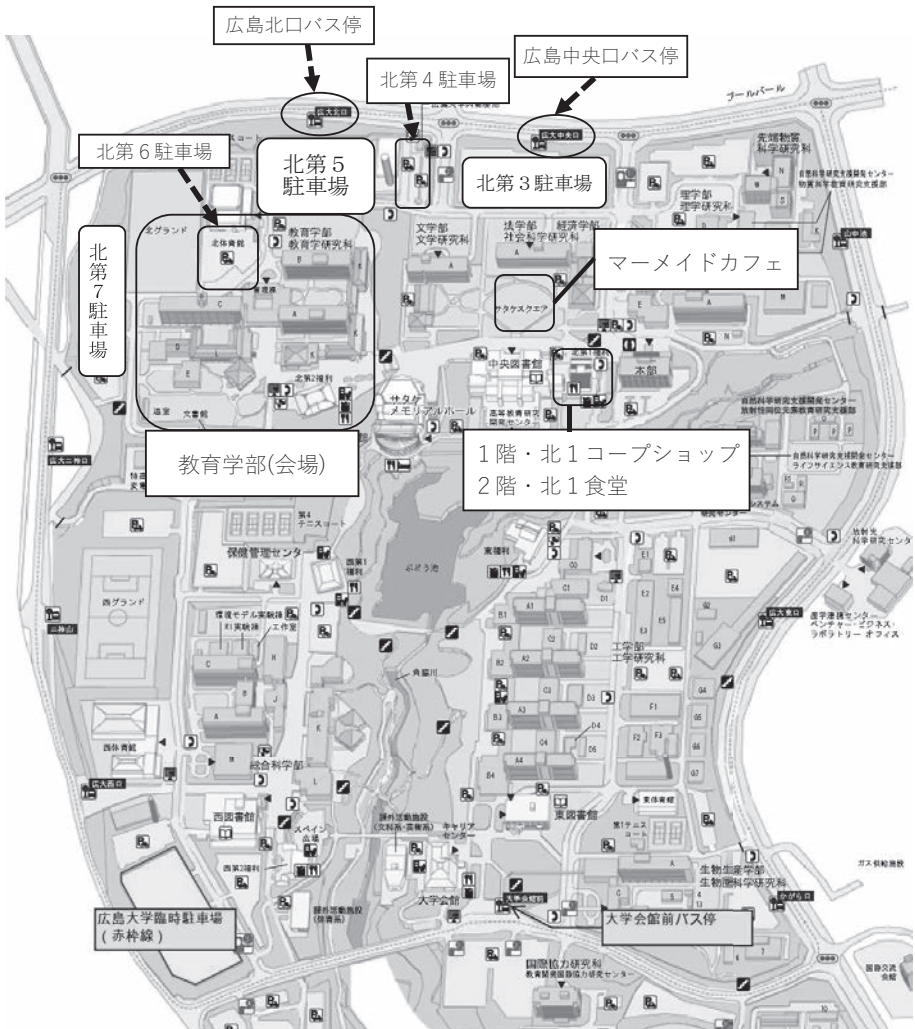
【高速バスをご利用の方】

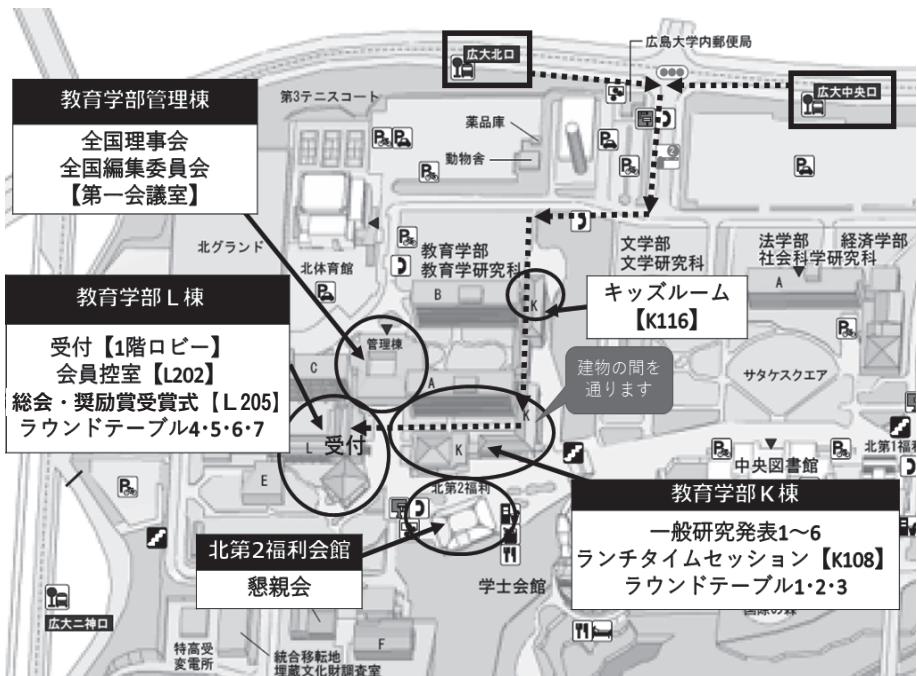
- そごう広島店2階広島バスセンター①番乗り場から高速バス（グリーンフェニックス）に乗車。
- 広島大学中央口下車。

【広島空港をご利用の方】

- （広島バスセンターへ）1番乗り場から平和大通り線・広島バスセンター・中筋駅行のリムジンバスに乗車。「広島バスセンター」下車。
- （広島駅へ）2番乗り場から広島駅新幹線口行リムジンバスに乗車。「広島駅新幹線口」下車。
- （西条駅へ）4番乗り場から西条駅行リムジンバスに乗車。「西条駅北口」下車。

会場全体図





【教育学部L棟】

受付（1階ロビー）

会員控室（2階 [L202]）

一般研究発表7（1階）

研究討議・課題研究・総会（2階 [L205]）

ラウンドテーブル4～7（1階）

【教育学部管理棟】

全国理事会（第一会議室）

全国編集委員会（第一会議室）

【教育学部K棟】

一般研究発表1～6（1階）

ランチタイムセッション（1階 [K108]）

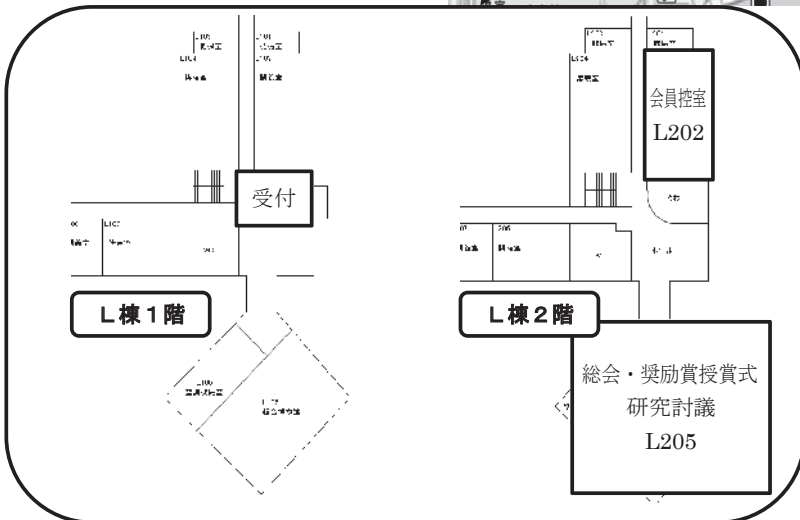
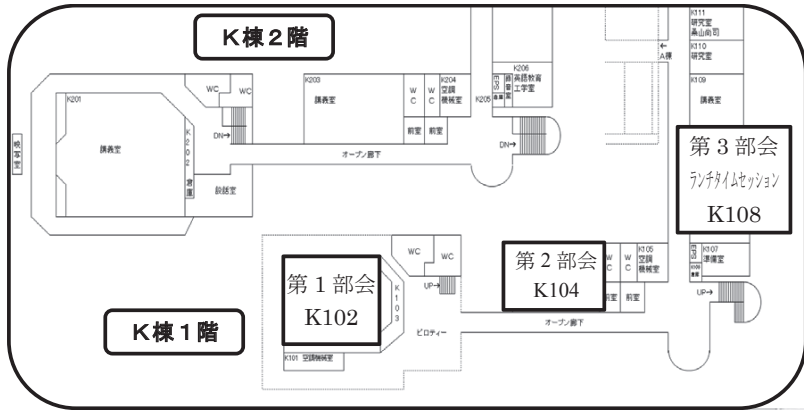
ラウンドテーブル1～3（1階）

キッズルーム（1階 [K116]）

【北第2福利会館】

懇親会

10月12日（土）会場案内図



ドイツの教育哲学①

司会：西村 拓生（奈良女子大学）・池田 全之（お茶の水女子大学）

- 10:00 N. ルーマンの社会システム理論における学習論
鈴木 篤（大分大学）
- 10:25 ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの
人類学的思想に基づく学問観
高田 澄香（東京大学・院生）
- 10:50 ハイデガー存在論における学的行為の事実性
森 七恵（京都大学・院生）
- 11:15 カントにおける「二重の固有性」の問題
土屋 創（東京大学・院生）
- 11:40 森昭における「世界内存在」について
—田邊元のハイデガー解釈との関連性—
川上 英明（東京大学・院生）
- 12:05 全体討議（～12:30）

英米の教育哲学①

司会：斎藤 直子（京都大学）・田中 智輝（立教大学）

- 10:00 「自己を語りなおす」とはどのようなことか
ノーマン・K・デンジンの質的調査論からの考察
高田 正哉（上田女子短期大学）
- 10:25 ケイパビリティ・アプローチのポストコロニアル的検討
—「帝国主義」的な教育開発を回避する M.ヌスバウムの議論から—
虞 嘉琦（広島大学・院生）
- 10:50 相互的な説得行為としての教育学研究実践：
R. J. バーンスタインのアレント公共性論読解から
深見 奨平（広島大学・院生）
- 11:15 遊びから政治的行為へ
—ハンナ・アレントにおける自発性概念の変遷に着目して—
樋口 大夢（東京大学・院生）
- 11:40 R. W. エマソンの超越主義的教育思想における背景としての宗教
都田 修兵（岡山短期大学）
- 12:05 全体討議（～12:30）

第3部会

教育学部 K108教室

メディアと災厄

司会：山名 淳（東京大学）・渡辺 哲男（立教大学）

10:00 原爆絵本研究における脱集計化と脱中心化の試み

村上美奈子（立正大学）

10:25 フォイヤーシュタインの認知発達論とその教育学的意義

林 照子（広島大学・院生）

10:50 事物を介する自己陶冶についての一考察

—京都学派「包越」概念を手がかりに

門前 斐紀（立命館大学 / 大阪教育大学）

11:15 公害とミュージアム

寺岡 聖豪（福岡教育大学）

11:40 全体討議（～12:05）

ランチタイムセッション

国際交流から今後の教育哲学のあり方を考える

——教育哲学研究の国際化とキャリア形成のゆくえ—— (仮)

【企画】 下司 晶, 小野文生, 生澤繁樹, 井谷信彦, 平田仁胤, 室井麗子 (教育哲学会次世代育成企画委員会)

【司会】 室井麗子 (岩手大学), 下司 晶 (日本大学)

【報告】 平石晃樹 (金沢大学), 広瀬悠三 (京都大学), 上野正道 (上智大学)

「次世代育成企画委員会」による企画です。比較的研究歴の浅い会員の積極的な参加を期待します。

第3回目となる本年は、「国際交流」が推奨され大学や人文社会科学研究が急速に「国際化」「グローバル化」される近年の状況の中での、教育哲学のあり方や今後の行方について考えたいと思います。

近年、教育政策の一環として、大学の国際化やグローバル化が加速度的に推進されています。教員や学生の「国際交流」の推奨、ダブルディグリープログラム、デュアルディグリープログラムの推進、講義等の「英語化」、官民連携による留学生倍増政策、大学ランキングの上昇のための取組み等がその具体化の一端です。

研究に目を転じると、自然科学研究のみならず、人文社会科学研究もこのような流れに無関係ではいられない状況です。(多くの研究資金の“競争的資金化”も相俟って)学問領域のみならず様々な国や地域の研究者が参加するプロジェクト型の国際的共同研究が主流となり、研究での使用言語・共通言語の「英語化」も急速に進んでいます。そして、このような人文社会科学研究の国際化やグローバル化の潮流の中で、学問の地域性の希薄化も急速に進んでいます。例えば、大陸哲学、英米哲学、ドイツ観念論、京都学派等々、地域や土地やそこに根ざした研究機関・拠点といった「場」や「空間」が、

そしてそれらに密接する「言語」や「言葉」が、思索を生成し学問へと精錬していく… こういったことも早晩なくなるかもしれません。

しかし同時に、このような状況は、文化や地域や国などを越えた研究者同士の知的交流の活性化をもたらしています。そしてそれは、「グローバル」や「Englishes」（英語の多様化）といった今やすっかり馴染みになった現象をももたらし、逆説的にも、「ローカル化」の新たな地平を拓きました。よくよく歴史を振り返ってみれば、上記の京都学派も、近代化や国際化が進む中で「日本」および「東洋」が「西洋」という存在を見出し「西洋学問」と対峙することを通して再帰的に形成されたものでした。人文社会科学研究の国際化やグローバル化は、研究や学問の地域性の希薄化と同時に、それらの新たな地域性をも生成するという、両面的な可能性を有しています。

では、今日、大学や人文社会科学研究の国際化、グローバル化が急速に進む中で、今後の教育哲学研究はどのようにありうるのでしょうか？ その方向性はどうなるのか？ さらに、このような状況下で若手研究者はどのようにキャリアを形成していけばよいのか？ これらの問いについて、ざっくばらんに意見を交換し合いながら一緒に考えてみませんか？ 本企画の前半部では、海外の大学で研鑽を積まれた若手会員、それから、国際共同研究を積極的に進められ国内外にその成果を発信されている若手会員に話題提供をして頂き、後半部では、そのご報告を中心に全体でディスカッションを持ちたいと考えています。なおその際、今大会の課題研究“Globalization, Internationalization, and Universality of the Philosophy of Education”とも関連づけながら議論を展開できればとも思っています。

本企画はランチタイムセッションとして行われます。昼食をとりながらお気軽にご参加下さい。なお、会場での昼食の販売はございませんので、ご持参下さい。

研究討議

HIROSHIMA という記憶の継承と和解： 日独韓の声の交わりに見る表象の刷新

Inheritance of HIROSHIMA Memory and Emerging Reconciliation:
Changing Representations in Polyphony of/between German,
Korean and Japanese Voices

司会：丸山 恭司 (広島大学)

山名 淳 (東京大学)

報告：Lothar Wigger (ドルトムント工科大学)

金 鍾成 (広島大学)

1945年8月に原子爆弾が広島と長崎に落とされた。74年が過ぎた今も、その意味をめぐる論争に終わりは見えない。投下を正当化する声と被爆の惨状を伝える声はすれ違い、交わることがない。

確かに、2017年7月に国連総会において核兵器禁止条約が採択されたことは、核兵器の廃絶という被爆者の長年の願いを実現するに大きな一歩であった。しかし、米国を含む核保有国はいずれも採択の場に姿さえ現していない。核兵器による被害は「人道に対する罪」であり、そのことは原爆が広島と長崎の人々にもたらした惨状から明らかである。にもかかわらず核兵器の廃絶が進まないのは、被爆の実相が世界に知られていないからではないか。

そうした想いから多くの被爆者が原爆の辛い思い出を語り絵に描いて惨状を伝えようとしてきた。しかしながら、70年を超える年月は、被爆者の高齢化を決定的なものとしており、近い将来、被爆の実体験を語ることでできる者がいなくなってしまうことは明白である。被爆の実相が正しく理解されないまま核兵器が再び使われてしまうことがないよう、広島・長崎の記憶をいかに継承していくかが喫緊の課題となっている。

この課題に対し、教育学に何ができるだろうか。

ここで踏まえるべきは、問題の複雑さである。ヒロシマ・ナガサキは、科学、医療、政策、宗教、倫理、政治といった様々な言説が飛び交うなかで様々な理解されてきた。情報不足、無理解・無関心、悔い、使命感・正義感等とともに、立場の異なる人々が異なる表象の下で理解してきたのである。例えば、人類史上初めて原爆が落とされた広島は、国際平和都市 HIROSHIMA として復興したが、戦前は中国大陸に多く

の兵士を送り出した軍都であった。HIROSHIMA が原爆の被害を強調すればするほど、アジアにおける日本の加害を見えなくしてしまうとの批判がある。また、HIROSHIMA が平和を祈念する思想として普遍化され、外部賛同者のヒロイズムと結びつくとき、被爆者の苦しみ の個別性（肉親・友人を突然に失い、熱線火傷を負い、生き残った者の負い目を感じながら、放射能の不安に苛まれ、差別に苦しめられてきた経験の個別性）が些末なものと思なされてしまう。HIROSHIMA を戦禍終結のシンボルとする声はその被害を訴える声をさえぎり、鎮魂を求める声は開発（生活の豊かさ）を求める声に対抗する。この複雑のなかで、表象を刷新し和解を生み出すような記憶の継承はいかに可能であるのか。教育哲学はこの課題に対し、どのように応答することができるのだろうか。

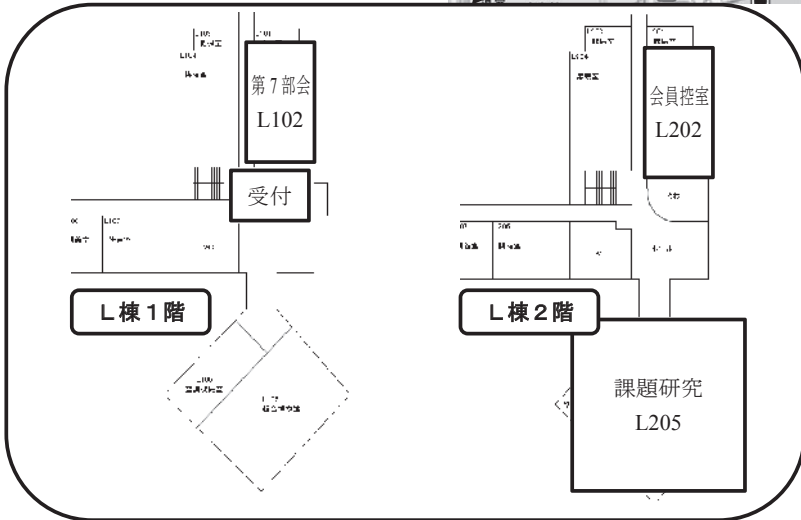
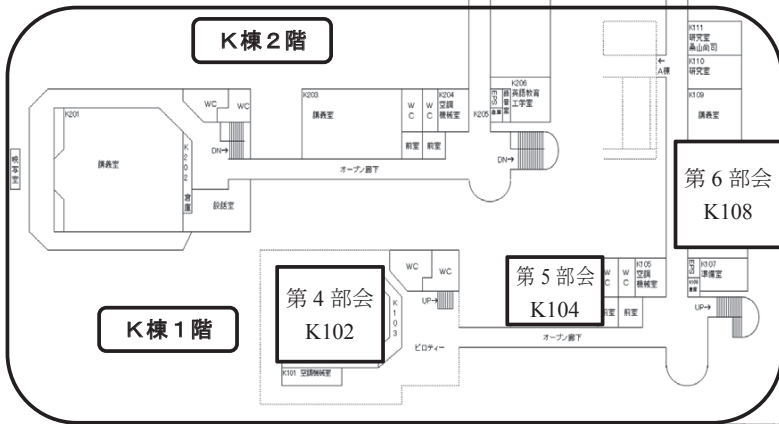
この課題に応えるために、本研究討議では、ドルトムント工科大学の Lothar Wigger（ローター・ヴィガー）氏と広島大学の金鍾成（キム・ジョンソン）氏をお招きして HIROSHIMA の表象と和解をめぐる実践と課題を報告いただく。

Wigger 氏は『災害と厄災の記憶を伝える：教育学は何ができるか』（山名・矢野編著、勁草書房、2017年）に「カタストロフィーと教育学」を寄稿したドイツの教育哲学者であり、『承認と人間形成』（北大路書房、2015年）の編著としても知られていよう。最近では広島平和記念資料館をフィールドとする研究も始められている。氏には、「ドイツにおける HIROSHIMA の遺産」（仮題）と題して、まずドイツにおける HIROSHIMA の表象を、教科書やマスメディアにおける扱われ方の分析を通して報告いただき、戦争の記憶の継承がいかに和解を可能／不可能とするのかを、ドイツの文脈から批判的に提起いただく。

一方の金氏は社会科教育学を専門とする新進気鋭の研究者である。氏は「市民」や「国民」の概念に着目し、自国のソトにいる他者との共存を意識する子どもの育成を目指して開発的研究を進めており、最近の関連業績としては、Kim, J. (2019). “Beyond national discourses: South Korean and Japanese students ‘make a better social studies textbook’.” In a B. C. Rubin, E. B. Freedman, & J. Kim (Eds.) *Design research in social studies education: Critical lessons from an emerging field*. Routledge. がある。この度は、「他者の語りに開かれた市民を育てる：日韓の社会科教員志望学生による『より良いヒロシマ教科書づくり』プロジェクトを事例に」（仮題）と題して、日韓両国の社会科教員志望学生が HIROSHIMA の表象をどのように刷新させて共通理解に至り得た／得なかったのかをご報告いただき、HIROSHIMA という記憶の継承と和解のあり得る方向を示唆いただく。

はじめに、司会の丸山が研究討議の趣旨を説明し、HIROSHIMA をめぐる諸問題の概略を解説したうえで、Wigger 氏と金氏に報告いただく。これらを承けて、もう一人の司会の山名が HIROSHIMA 問題の教育哲学的課題を文化的記憶論の観点から明示した後、討議の時間とする。

10月13日（日）会場案内図



第4部会

教育学部 K102教室

ドイツの教育哲学②

司会：関根 宏朗（明治大学）・白銀 夏樹（関西学院大学）

- 9:30 エーリッヒ・フロムにおける宗教の理解と自己実現論の関連
森田 一尚（京都大学・院生）
- 9:55 ベンヤミンにおける「同一性」の問題
—教育学における「自己活動」概念再考の試み—
浅井 健介（京都大学・院生）
- 10:20 S.フロイトにおける精神分析と教育との「関係」－「教育」、
「事後教育」、 「精神分析的教育」に着目して－
後藤 悠帆（京都大学・院生）
- 10:45 Th・W・アドルノにおける精神分析の受容
安道健太郎（日本大学・院生）
- 11:10 全体討議（～11:35）

英米の教育哲学②

司会：伊藤 博美（椋山女学園大学）・尾崎 博美（東洋英知女学院大学）

- 9:30 ケア論がもつパターンリズム的特質
—N. ノディングスの「推測されたニーズ」論から—
坂本 達也（広島大学・院生）
- 9:55 ノディングズのケアリング論の変容
—engrossment から attention へ
増山 美枝（お茶の水女子大学・院生）
- 10:20 熟議をめぐるリベラル市民性教育論の対立構図の再検討
—ロールズの二つの“reasonable”概念に着目して—
中西 亮太（東京大学・院生）
- 10:45 J.H. ニューマンの高等教育論における「知の統合」理念の形成
—19世紀前半のオックスフォード大学をめぐる古典人文教育論争に着目して—
青木由紀子（上智大学・院生）
- 11:10 公教育の正統性について
—W. キムリッカの多文化主義論に注目して—
橘 諒治（東京大学・院生）
- 11:35 全体討議（～12:00）

第6部会

教育学部 K108教室

フランス・イタリアの教育哲学

司会：室井 麗子（岩手大学）・平石 晃樹（金沢大学）

- 9:30 脱人間化と超人——封建社会と近代社会のあいだで
森 亘（京都大学・院生）
- 9:55 フーコーの統治性理論における新自由主義批判と主体形成の問題
張 林倩（名古屋大学・院生）
- 10:20 リケールの思想における「死」の意味
—初期の生命論と後期の歴史論との連関に注目して—
朝岡 翔（関西大学等）
- 10:45 G. アガンベンにおけるインファンティア概念の射程
原田 拓夢（東京大学・院生）
- 11:10 全体討議（～11:35）

教育実践の哲学

司会：奥井 遼（同志社大学）・藤川 信夫（大阪大学）

- 9:30 特別活動における「話し合い」の理論的省察
—討議倫理と合意形成の視座から—
田端 健人（宮城教育大学）
- 9:55 人が人を教育するとはどういうことか
松村 一徳（広島修道大学）
- 10:20 身体技法の伝承における教育的関係の構築過程に対する構造論的分析
—ヴォイス・トレーニングを例として—
堀 雄紀（京都大学・院生）
- 10:45 教育学とテクノロジー
—夢と幻滅を超えて—
加藤 守通（上智大学）
- 11:10 全体討議（～11:35）

MEMO

A series of horizontal dotted lines for writing a memo.



課題研究

Globalization, Internationalization, and Universality of Philosophy of Education

- 司 会：岡部美香（大阪大学）
小野文生（同志社大学）
- 提 案：Liz Jackson（香港大学／オーストラリア教育哲学会会長）
斎藤直子（京都大学）
- 指定討論者：Lothar Wigger（ドルトムント工科大学）
小玉重夫（東京大学）
今井康雄（日本女子大学／教育哲学会代表理事）

教育哲学会・今期理事会（2017～2019学会年度）は、特に「教育哲学の国際化」に力を入れてきた。2016年3月に公式に設置された国際交流委員会は、同年11月より教育哲学会英文ホームページを立ち上げるとともに、英文ジャーナル（English E-Journal of the Philosophy of Education）をWEB上で毎年発行している。また、一昨年（2017年）の第60回大会（2017年10月 大阪大学）および昨年（2018年）の第61回大会（2018年10月 山梨学院短期大学）の課題研究では、海外から教育哲学研究者を迎え、英語を共通言語とする国際シンポジウムを開催した。今回の第62回大会では、研究討議・課題研究とも同様の国際シンポジウムとして企画されている。これらのことに鑑みても、教育哲学会の国際化は確かに促進されつつあるといえるだろう。また、社会のグローバル化の進行や文部行政による高等教育の国際化の推進という動向とも相まって、近年、海外の学会で活躍したり国際共同研究に参加したりする会員が増えてきているという事実は、学会員の国際化が進んでいることも示している。

だが、ここでさらに問われねばならないのは、教育哲学研究にとって国際化とは何を意味するかということである。なるほど教育哲学は、比較的、日本以外の思想や理論、実践に開かれてきたと言えるし、その意味においてはすでに国際的であったと言うことはできるかもしれない。けれども、これまでも幾度となく指摘されてきたように、日本の学問は西洋近代のシステムに強く依存し、その制度や文化、諸価値の移入や再生産に与ってきたのであって、その国際性にはある種の「偏り」がある。しかし、ならば研究対象をアジア、ラテンアメリカ、アフリカ、ロシア（旧ソ連）、東欧の思想や実践に拡大すればよいのかといえば、単純にそうとも言い切れない。われわれの知を生み出すシステムの構造や慣習が問われなければ、単に知の植民地化を推し進めるだけで終わりがかねない。教育哲学という学問もまた、ポスト

コロナアルな諸課題と無縁ではありえないはずである。

グローバル化の時代といわれる今日にあって、国際化とグローバル化は同じことを意味するのだろうか。英語を通じた研究（だけ）が国際的であることを担保しうるのだろうか。国際的であることと、その研究が示しうる普遍性・世界性は、どのように重なり、どのようにすれ違うのか（たとえば、日本語で書かれた教育哲学論文は、「国際的」でもなく「普遍的」でもないのだろうか）。一口に英語圏といっても多様な文化的背景や社会的文脈を有しているはずだが、そうした個別の背景や文脈は国際化のなかでどのような変容をこうむっているのか。インター・ナショナルであることが、結局のところナショナルなもの前提によって可能であるとするならば、かえってナショナルなもの強化という皮肉な結果を導くことはないのだろうか。グローバル社会における国際化が、標準化と新たな分断化や序列化を促進してはいないか。もし、その傾向があるとしたら、そうならないよう、できるなら多様性や複数性を十分に保持できるよう、どのような仕掛けや工夫ができるのか（あるいは、すでにしているのか）。また、そうした多様性や複数性が単なる相対主義に陥らないよう、いかにして教育哲学研究の普遍性を追求し得るのか。こうした多くの問題に、他の国や文化圏ではどのような応答を積み重ねてきたのか。そしてまた、日本の教育哲学者は、それらの問題にどのように向き合うべきなのだろうか。

以上のような問題を踏まえ、本課題研究では、グローバル化社会における教育哲学研究の国際化の動向と今後のあり方について、海外の教育哲学関連学会の動向と比較しつつ考えてみたい。登壇者として、まず、アジア各国の教育哲学者が多く参加し、東アジア諸国の教育哲学会との連携をめざしつつある海外の学会の一つ Philosophy of Education Society of Australasia (PESA) から会長の Liz Jackson 氏 (Hong Kong University) を招き、PESA の国際化の動向および中国との関係における香港の教育哲学研究の現状について、上述の問題に関するご自身の見解を含めて語っていただく。次に、国際教育哲学会議 (International Network of Philosophers of Education, INPE) や英米圏の教育哲学関連学会で活躍しておられる斎藤直子氏 (京都大学) にご登壇いただき、英米圏の学会の動向やご自身の「翻訳としての哲学」を踏まえて報告していただく。これを受けて、指定討論者の Lothar Wigger 氏 (Technische Universität Dortmund) から、Jackson 氏および斎藤氏のご発表に対して、英米圏以外の国における教育哲学研究の国際化の動向と比較しつつコメントをいただく。私たちは、英語による業績が強く求められるという現状をドイツと共有している。ドイツにおける教育哲学研究の国際化の動向と今後のあり様について語っていただくことは、私たちに有意義な示唆をもたらすだろう。続いて、小玉重夫氏 (東京大学) から教育哲学研究のグローバル化に関する見解を述べていただき、外国語と日本語の双方で教育に関する研究活動をすることの意義についてお話していただく。最後に、教育哲学の国際化を進めてこられた今井康雄代表理事 (日本女子大学) に、教育哲学の国際化の動向と今後のあり方について、ご自身の経験を踏まえながら総括的なコメントをしていただく。提案やコメント、その応答などを素材としながら、会員の皆さんと活発な議論をおこないたい。

THEMATIC RESEARCH

Globalization, Internationalization, and Universality of the Philosophy of Education

- Moderators: Mika Okabe (Osaka University)
Fumio Ono (Doshisha University)
- Presenters: Liz Jackson (The University of Hong Kong)
Naoko Saito (Kyoto University)
- Discussants: Lothar Wigger (TU Dortmund University)
Shigeo Kodama (The University of Tokyo)
Yasuo Imai (Japan Women's University / President of PESJ)

Abstract

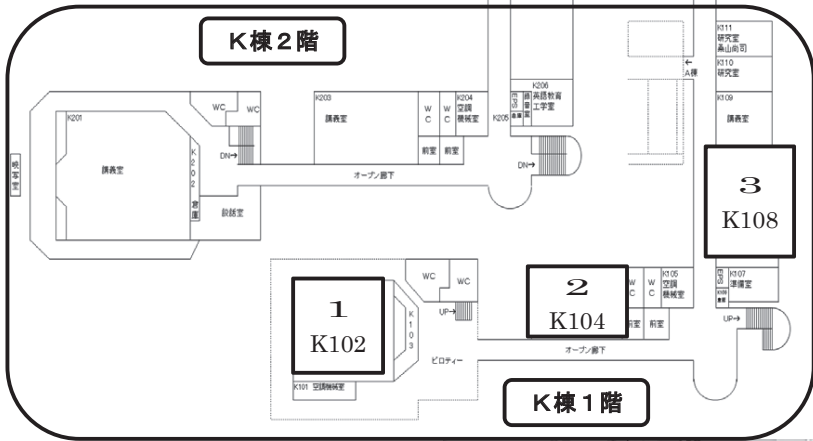
The Board of Directors of the Philosophy of Education Society of Japan (PESJ) has been especially promoting 'the internationalization of philosophy of education' since 2016. The International Exchange Committee, officially established in March 2016, launched the English website of the Society, and since then has been editing another annual journal on the website: the *English E-Journal of the Philosophy of Education*. In addition, English-only international symposiums with philosophers of education from overseas were held at the annual conferences in 2017 and 2018. These were the first trials for our society, where all participants spoke English in the discussion without a designated translator. This time in Hiroshima, we have two more similar international symposiums including this Thematic Research. Therefore, it could be said that the internationalization of our society (PESJ) is certainly being promoted. Besides this, following the recent trend of the globalization of Japanese society and the promotion of internationalization of higher education by MEXT, a lot of members of our Society are joining and playing active parts in international academic conferences and collaborative researches. This also shows the internationalization of 'our members' is being advanced.

At the moment, however, we should take into consideration the question of what the internationalization means for the 'study of philosophy of education' itself. It is true that the philosophy of education in Japan has relatively been open to foreign thought, theory and practice, and therefore we might say we have already been internationalized in that sense. As it is often critically mentioned, however, the modern Japanese academic system has unduly been learning and importing Western systems, cultures and sense of values and attempting to reproduce them. The state of the internationalization of the philosophy of education in Japan is therefore never well-balanced. However, the mere correction of balance and the simple expansion of research fields into non-Western countries such as Asia, Latin America, Africa

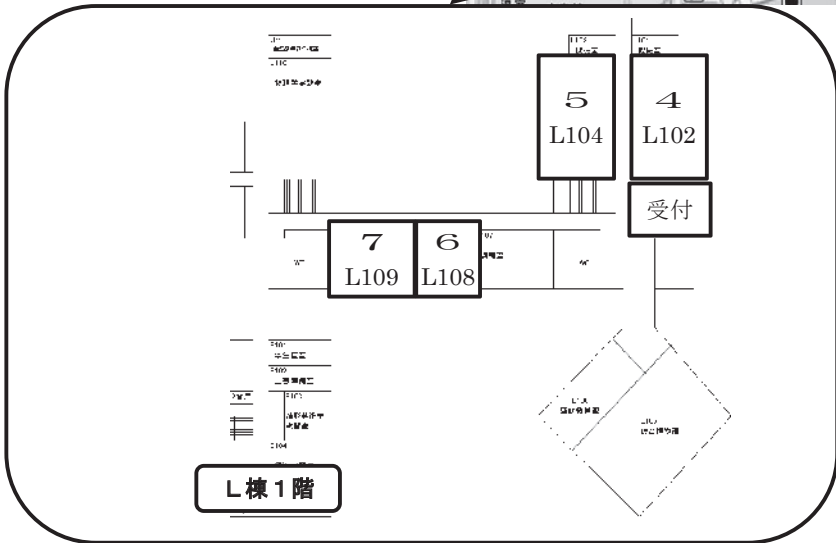
as well as Eastern Europe would not necessarily solve the problems. Without questioning the structure and customs of our intellectual system, it might result merely in a further promotion of the academic colonization. The study of philosophy of education also cannot have nothing to do with the so-called post-colonial problems.

We then might have many questions as follows: Is there no difference between internationalization and globalization today? Can the medium of English by itself guarantee the internationality of study? How does the internationality of our studies correspond exactly to the universality they could show? Is a paper written in Japanese, for instance, ‘international’ or universal? If there is a great variety of cultural and social contexts in each country, even in the English-speaking world, what kind of change do they undergo in the age of globalization? If the national is a precondition for being inter-national, doesn’t the internationalization ironically result in the reinforcement of the national and in a new standardization, segmentation or classification? If so, in what kind of ways can we think for the sake of avoiding such standardization, segmentation and classification; namely, for the sake of maintaining the diversity and plurality of each culture and society? How can we then, on the contrary, achieve the universality of our studies and avoid mere relativism? How have the scholars of other countries and other cultural spheres accumulated their experience in confronting with these problems? What kind of response can we Japanese philosophers of education make to them?

Based on the aforementioned issues, we would like to consider in this Thematic Research the current and future situation of the internationalization and/or globalization of philosophy of education in the globalized world, while comparing that of our society to those of societies abroad. As the first presenter, we invite Prof. Liz Jackson from Hong Kong University, who is the president of the Philosophy of Education Society of Australasia (PESA), one of the overseas academic societies aiming to collaborate with philosophy of education societies in East Asian countries. Prof. Jackson will talk about the trend of the internationalization in PESA, the current academic situation in Hong Kong in relation to China, and her own vision for the aforementioned problems. The second presenter, Prof. Naoko Saito from Kyoto University, will talk about the current and future situation in the International Network of Philosophers of Education (INPE) and other academic societies in the UK and the United States. Prof. Saito will also present her own philosophical experience among several languages and ideas of the “philosophy of translation.” After the presentations from Prof. Jackson and Prof. Saito, Prof. Lothar Wigger from Technische Universität Dortmund will make a comment on the theme of this Thematic Research, from the viewpoint of non-English-speaking countries, where, as well as Japan, the academic achievements written in English are demanded more and more by the administrations of universities and ministries. The story in Germany will bring meaningful suggestions for us. Following this, Prof. Shigeo Kodama from the University of Tokyo, as the second discussant, will talk about his standpoint toward the globalization of the study of philosophy of education, especially about the significance of educational study both in foreign languages and Japanese. Finally, the president of our society, Prof. Yasuo Imai, who has promoted the internationalization of the study of philosophy of education itself and of our society, will give us his comprehensive comments regarding with this Thematic Research.



ラウンドテーブル
会場案内図



ROUND TABLE 1

教育学部 K102教室

ケンブリッジ学派の方法論が切り開く ペスタロッチ研究の展望と課題

ー ルソー政治思想研究者との対話を通してー

企画者：鳥光 美緒子（中央大学）・椋木 香子（宮崎大学）

司会：椋木 香子

提案者：小林 淑憲（北海学園大学）・鳥光 美緒子

ペスタロッチ生誕記念祭から20年以上が経過し、「脱神話化」というスローガンはもはや旧聞に属するものとなった。だが脱神話化の挑発は、その及ぼす作用の方向は様々であれ、ドイツ語圏でも日本でも、研究のあり方を再考する優れた刺激になったかに見える。私見だが、ペスタロッチ研究はむしろここにきてようやく本格化しつつあると言えるのではないか。

ドイツ語圏でその中心を担うのがD.Troehlerである。彼は脱神話化的研究が滞ったのは方法論意識の欠落によると指摘。ケンブリッジ学派の方法論を基礎に、チューリヒの言説界との関連でペスタロッチ思想の解明を進めている。

話題提供は、政治思想史研究領域から、ケンブリッジ学派の方法論に基づきジュネーヴ言説界とルソー政治思想との関連を研究している小林淑憲氏に依頼した。

トレーラー文献と、そして小林氏との対話を通して、ケンブリッジ学派方法論が切り開くペスタロッチ研究の可能性について考えてみたい。

教育における分配的正義論の可能性

企画者・提案者：高宮 正貴（大阪体育大学）

提案者：橋本 憲幸（山梨県立大学），児島 博紀（富山大学）

指定討論者：平井 悠介（筑波大学），玉手 慎太郎（東京大学）

現代の正義論では財をいかに分配すべきかが問われており、ロールズやセンなどのアプローチが競合している。教育学でも、分配的正義論を踏まえつつ、誰が、誰に、どの範囲で、どのような教育機会を、どの程度分配すべきかが問われてきた。しかし課題も残る。第一に、教育の分配は物的資源の分配とは異なるため、分配的正義論をそのまま適用するわけにはいかない。たとえば一定の総量の資源を分配するゼロサム的なモデルでは、有名校で教育を受けることで才能を伸ばした人が、そうでない人よりも他の人々に資するかもしれないという事態を捉えられない。また、教育者の知識は教育することで減るわけでもない。第二に、教育という財の意味の画定である。それは教育の費用なのか、教材等の物的資源なのか、教育の結果得られた能力なのか、教育行為それ自体なのか。このように、本企画では教育の特殊性に着目しつつ、教育における分配的正義論の可能性を考える。

科学・技術の革新は教育と教育学に どのような変革を迫るのか

—産業構造の転換と教育（哲）学の課題—

企画者・司会者：松浦 良充（慶應義塾大学）

提案者：杉田 浩崇（広島大学）

間篠 剛留（日本大学）

指定討論者：鈴木 晶子（京都大学）

人工知能をはじめとする科学・技術の革新は、産業構造の転換を促し、人間の生活を、そして社会と教育のあり方を大きく変容させようとしている。この状況に、教育学や教育哲学はどのように立ち向かえばよいのか。もっとも歴史的に見て、科学・技術の革新が教育のあり方に大きな変動をもたらしたのは、今がはじめてではない。農業社会から工業社会、さらには脱産業化＝情報社会など、産業構造の転換は教育（像）の変革と軌を一にしてきた。その意味で、教育自体も一種のテクノロジーとしてこの変動に機能してきた。本企画では、現代における科学・技術の革新の動向を念頭におきながらも、視点をいったん歴史のなかに転じ、科学・技術の革新や産業構造の転換が、教育や社会にどのような影響を与えてきたのかについて検証する。そしてそれによって、科学・技術・産業の変動を、教育（哲）学の課題としてどのように引き受けてゆくのか、について展望し探究したい。

ディシプリンとしての教育学をめぐる 合同討論会

— 『日本教育学の系譜Ⅱ』刊行に寄せて—

企画者・提案者：小笠原 道雄（広島大学）
司会者：丸山 恭司（広島大学）
下司 晶（日本大学）
提案予定者：森田 尚人（元中央大学・教員）
森田 伸子（日本女子大学），
田中 每実（武庫川女子大学）

本企画は2007-9年度「戦後教育哲学の出発」をテーマとして教育哲学会の特定研究課題助成を受けて開始された＜戦後教育学の再検討＞を教育哲学的観点から行う日本教育学説史研究の成果を検討する合同批評会である。

本プロジェクトは第61回教育哲学会でのラウンドテーブルの討論を受けて今回合同討論によって検証することを目的とする。

ROUND TABLE 5

教育学部L104教室

教育哲学研究は道徳授業にどう貢献できるか

- 企画： 鈴木 篤 （大分大学）
山岸 賢一郎 （福岡大学）
提案： 塚野 慧星 （九州大学・院生）
田中 智輝 （立教大学）
山中（植田）翔（広島文化学園大学）
宮川 幸奈 （熊本学園大学）

今春より中学校でも「特別の教科 道徳」が全面実施されているが、戦後の道徳教育に関して倫理学者や心理学者たちと並んで発言や提言を繰り返し、大きな影響力を与えてきたのは、教育学者の中でも教育哲学を専門とする研究者たちであった。

他方、多くの教育哲学者たちは大学教育において教職免許法科目「道徳の理論及び指導法」も担当している。「道徳の理論及び指導法」では、教職コアカリキュラムにおいて10点の到達目標が示され、それらを授業の中で取り扱うことが求められている。また、それにともない模擬授業の実施と振り返りが求められるなど、（受講生の）道徳授業づくりとその改善についても指導を行うことも求められる。

そのような中、教育哲学者は道徳授業に貢献を行うことがそもそも可能なのか、そして貢献が可能なのだとしたらいかなるかたちでそれが可能なのか、本ラウンドテーブルでは改めて問い直してみたい。

臨床現象学：地を這うフィールドワーク

企画者・提案者：大塚 類（東京大学）

奥井 遼（同志社大学）

司会：西平 直（京都大学）

教育哲学研究にフィールドは不要か。思想研究とフィールド研究は交錯しないのか。

報告者2名は、フィールドワークで得た資料を現象学の知見に基づき考察してきた。「フィールドノート」や「インタビューデータ」を現象学の理論枠組みに即して理解し、逆に、現象学の理論をフィールドの視点から問い直してきた。その往復作業の研究手法を、本ラウンドテーブルは「臨床現象学」と呼ぶ。

しかし臨床現象学的研究は多様である。そこで報告者の事例を具体的に提示する。①どのようにフィールドに入ってきたのか、②事例を哲学の言葉を用いて考察する意味は何か、③「理論と実践との往還」とは何か。研究スタイルや考え方の微妙な違いを提示しつつ、フィールドワークに関心を持つ西平と共に、参加者と自由な議論を展開したい。

教育哲学においてフィールド研究が主要な方法になることはあり得ないだろうか……？

教育哲学と社会批判の(不)可能性

企画者・提案者：生澤 繁樹（名古屋大学）

室井 麗子（岩手大学）

藤井 佳世（横浜国立大学）

本ラウンドテーブルでは、批判理論、批判的教育学、統治性理論、主体と真理、プラグマティズムの探究と実在といったいくつかの視点・角度から社会批判の（不）可能性を考察し、従来の批判や抵抗のための哲学的・思想的方法がどこまで検討に持ちこたえうるものなのかを点検する。教育を哲学することの底流には、これまでの／もはやない／いまある／いまだない／これまでにない／これからの「社会」へと向けられた批判的アプローチがいくらか控えていたはずである。しかしそこで批判される「社会」とは実在や実体としてどこかに門戸を構えていたわけではなかったし、「批判」という営みもいまや経年劣化し苦戦を強いられた方法であるという意味で、社会批判はその（不）可能性を幾重にも問われることになってしまった。解放的教育学がしばしば課題を抱えたように、社会を批判するための教育のかたちを描いていくのは容易ではない。まして社会を批判することによって教育がいかに変わっていくのかという問いへの答えもどこに所在を求めべきか、いささか心許ないところもある。かつてバウマンが語ったように、社会批判の宛て先には、いまや現れるべき対象（ビッグブラザー！）の姿も形もその影すらも見あたらず、批判理論が取り組むべき主題も方法も宙に浮く。しかも空転しつづける批判の手綱を無理に引きしぼるほど、そのリアリティはいよいよ霞んでしまう。ただし、政治的中立性を装う知識産出と消費主義、嘘と改竄と自己検閲、孤立化と断片化、アルゴリズムによる統制、規制の強化と緩和を織り交ぜた新自由主義的統治のテクノロジー、あるいはまた誰もが潜在的に加担してしまいうる構造的な不正義など、批判の対象は行方をくらまし、あるいは気づかないところまで空気のように隅々に影響を及ぼす一方で、批判や抵抗の仕方、そして社会と批判への取り組み方や向き合い方もまた、新たにかたちを変える契機をそのうちに潜ませている。このことは、社会のあり方に強く規定された教育を哲学することの意味をいったいどのように変質させる（させない？）だろうか。

教育哲学会第62回大会準備委員会

【委員長】

坂越 正樹 (広島文化学園大学)

【事務局長】

丸山 恭司 (広島大学)

【委員】

小林 万里子 (岡山大学), 杉田 浩崇 (広島大学)

事務局：〒739-8524

広島県東広島市鏡山1-1-1

広島大学大学院教育学研究科・丸山恭司研究室気付

E-mail : pesj2019@hiroshima-u.ac.jp

[表紙・ロゴデザイン]

小笠原 文 (広島文化学園大学)



PESJ 62nd Annual Meeting